

中国語資料で読み解く戦時下阿部知二の上海滞在 (上) : 白文「私の先生阿部知二」によせて

蘇, 冠維
九州大学地球社会統合科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7318876>

出版情報 : 九大日文. 44, pp.37-47, 2024-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :



◎資料翻訳

中国語資料で読み解く戦時下

阿部知二の上海滞在（上）

——白文「私の先生阿部知二」によせて——

蘇冠維

一、中国語資料の翻訳と紹介のねらい

日本作家の上海滞在を通じて越境体験を研究する際、複数の言語や複眼的な視座が欠かせないことは言うまでもない。特に、日中戦争下という激動の時代に、上海に身を置いた阿部知二の足跡^①を辿る研究にとつて、言語の壁を越え、歴史の裏側に潜む声を拾い上げることは極めて重要である。しかし、現状では、研究者たちが取り扱う参考資料の多くが日本語文献に偏っており^②。当時の上海に息づいた多様な声や感情が、未だにその表層にしか触れられていないのが現実である。異なる文化が交錯し、時代の波に揉まれた上海という都市で交わされた言葉、心の葛藤、文化的対立や融合——それらを多面的に見つめ、様々な視点を交えることで、初めて阿部の上海体験や彼の文学に映し出された真実の一端を掴むことができるであろう。この課題に挑むためには、本稿では、一九四四年九月末から一九四五年四月までの約半年間、上海セント・ジョンズ大学において阿

部に師事した白文^③（本名劉駿仁、一九三三—一九九〇年）の回想記『我的老師阿部知二（私の先生阿部知二）』^④（白文が一九八四年十二月十八日に執筆）の翻訳と紹介を通して、阿部の上海体験研究に新たな視座を提供したいと考える。

なお、本稿の目的はあくまで中国資料の翻訳であり、日本語で再現可能な言葉遊びや微妙なニュアンスの部分については意訳で表現している。また、著作権上の理由から回想記の結末部分を割愛していること、さらに中国語原文の簡体字を日本語の漢字へと変換する措置も、投稿上やむを得ぬ対応であることをここに明記する。

二、日本語翻訳…「私の先生阿部知二」

本屋から『現代日本小説選』を買ってきたら、窓辺でお茶を入れ、タバコを吸いながら、目次からこの本の鑑賞を始めた。前に記載してある作家の正宗白鳥、石川達三については、昔彼らの作品を読んだことがあるが、読んだ作品数が多くはなく、「見覚えがある」としか言いようがない。谷崎潤一郎については、その選訳本の「悪魔」を読んだことがあり、前書きには彼が「悪魔派」と紹介される内容が書かれている覚えがある。私の専攻は世界文学史ではないため、今の評論家が彼をどう評価しているのかはわからない。何十年も前のことだから、はっきり覚えていないのも仕方がない。

これはどういふことだろうか。三九一頁にある『隠士と人々』

の作者は阿部知二と記されている。彼なのか？かつて私が知っていた、あの書生気質にあふれた日本の学者、セント・ジョーンズ大学で学んでいた時の先生、阿部知二様なのだろうか？

タバコの煙に包まれ、ついに物思いに耽つてしまった：

今からちょうど四〇年前、一九四四年の冬のことだった。

当時まだ二一歳の私は劇団で芝居をやっていた。給料も悪くなかったで、組織から、党独自の知識人を育てるため、自費で大学に通うように言われた。それで、同じ中学を卒業したT君とともに、努力の末、ようやく当時の有名校「セント・ジョーンズ大学」に入学した。

特に長くて、寒かったその年の冬に、私は袁世凱を演じる⁽⁵⁾のに夢中で、自分なりに上手く演じていると思っていた。

ある夜、芝居が終わり、私は舞台裏でメイクを落とし、石揮⁽⁶⁾や他の同僚たちと夜食を食べに行こうとしていたところ、突然、舞台美術のSが、ある日本人を連れてやってきて、「白文、あなたの先生が探しに来たよ」と言った。

驚いた私は「どうして日本人が来たんだ？バレてしまったのか？」と思いつつ、頷いて挨拶し、彼らに席を譲りながら、メイク落としのティッシュで顔を拭き、状況を見て考えていた。

私はその時、地下工作を数年間やっていて、しかもこのような公に知られた身分で情報活動をしていたので、案外冷静でいられるようになった。彼は見るところ三〇歳前後で、古いスーツに古いコート、ひどい近眼で学者の雰囲気があるので、日本のスパイか文化スパイのどちらかだと判断した。

突然、彼は日本語訛りの英語で話しかけてきた。「あなたはセント・ジョーンズ大学で英文学を学んでいるのですか？」

私は「うーん、うーん：」と答え、ティッシュで唇を拭きながら、鏡越しに彼を覗いた。

「私はアベジニ⁽⁷⁾と言います。そういえば、英文学も教えていますが、まあ、あなたの教師かもしれませんね：ちなみに、私の文学批評の授業を受けましたか？」

私は首を振った。「残念、私の授業を聞きに来るべきでした：」と彼は言った。

この時、Sは「彼は阿部知二、あなたたちの学校の教授で、日本にいたときからの知り合いなんだ」と私に紹介してくれた。私は少しほつとした。Sは政治的に信頼できると思っていた。

彼女は日本で絵を学び、戦争で帰国して新四軍に入り、病気で精兵簡政のため退役したが、政治的に問題はなく、憲兵隊や「七六号」⁽⁸⁾に入ったこともない。まあ、そういえば、彼女は私の遠い従姉だ。把握している情報によれば、彼女が私を裏切る必要はなかった。何と言つても、私は非常に慎重に情報を守っているし、行動もある程度地味だったため、母親ですら私が共産党員であることを知らない。何を心配する必要があるのだろうか？

そう考えたら私はティッシュを投げ捨て、衣装を着替え「布柴牛乳を飲みに行こう」と言った。

「布柴牛乳」というのは、道脇の小さな公園にある白系ロシア人のバーである。冬にはワインや冷製料理、温かい紅茶など

を提供し、夏には「布柴」と呼ばれる冷たい飲み物とクワスを出す。「布柴」は牛乳のようなミルクであるが、飲むと甘酸っぱい味がして、キンキンに冷えているため、暑い日には最高で、暑氣払いをし喉の渴きをいやしてくれる。穀物で作られているそうで、パンを発酵させて作られた「クワス」よりもずっとおいしい。劇団の皆さんは夏になるとよく飲みに行くが、私はといえば、そこでウォッカやピクルスも売っているので、寒くなってきたてもしょっちゅう行く。このことでよく石揮に揶揄われる。

当時、酒を飲むのは偽装のためだったが、解放区に行つてからはやめられなくなつた。それ以来ずっと飲み続けていて、還暦を過ぎた今でもお酒を飲んでいる。ただ、このことで妻や子供にしょっちゅう怒られるのは予想外だった。

余談はこの辺にしておこう。さて、「布柴」バーに着いたとき、私は先生に「お酒を飲みますか」と尋ねた。

「飲みますよ」と彼は嬉しそうに答えた。

私はウォッカを四杯、ピクルスとトマトミート、そしてS従姉の紅茶を注文し、彼と杯を交わし始めた。お酒を飲むとき、彼の喉から「ゴクツ」という音が聞こえたのに驚いた。喉を詰まらせてしまいそうなほどだった。

これはすごい。私ならきつとむせてしまうだろう。今でも、一リットルのビールや半斤のバイカルを飲み干すときでさえ、音を立てずに口をすばめて一気に飲み込むことができる。ただし、飲み物が喉にまで来たら、たとえ湯冷ましであつても激し

くむせることになるだろう。

彼はどうやら酒が好きなようだが、酒に強いわけではない。ウォッカを二杯飲むと少し饒舌になり、舌も少し回らなくなる。ちようどその時、白系ロシア人の店主が気を利かせて、大きなグラスに入つた赤ワインを二杯持つてきて「イタリアのヴェルモットだよ、お手頃価格だ」と言つた。彼は一口飲むと思わず「うまい！」と声を上げ、そのまま一気に飲み干した。私はボケツトの中にまだお金が残っているのを確認し、ボトルを一本注文した。

すると、彼は私の学業について尋ね、演技を称賛してくれた（実際には非常に稚拙で、今思い返すと少し恥ずかしいが）。

さらに、「こんな有名な俳優の先生でいられることは本当に光栄だ」と言つた。私は彼の内心を探るため、また日本文学への興味を満たすべく、いくつかの質問を試してみた。

「白樺派の菊池寛……」、「武者小路実篤……」などと、次々と質問を口にする私に対し、彼はゆっくりとした調子で答えてくれた。しかし、私たちの会話は本当に困難だった。私の英語はあまり得意ではなく、彼の日本語訛りの強い英語もかなり聞き取りにくかった。それでも、S従姉が通訳をしてくれたおかげでなんとか進んだ。ただし、文学に関する話題になると彼女もよく分からないことがあり、その時は「手談」でやり取りするしかなかった。ここでの「手談」とは、囲碁ではなく、指にねつとりしたヴェルモットをつけてテーブルの上に字を書いて意思疎通を図るという意味だった。

「田山花袋の『春情草』について…」

彼は笑いながら指でガラス板に書かれていた文字を拭き取り、「春琴抄」と書き直した。私は顔がほてるようになり、よく分かっていないのに知ったかぶりをしていた自分に気づき、頬が赤くなってしまった。しかし、彼は笑いながら私の頭を軽く叩いて、日本語で何かを従姉に話した。

話が終わると、S従姉も私に微笑んで話の内容を通訳してくれた。「先生はあなたがとても熱心だと褒めていたのよ。分らないことをきちんと聞くのは立派なことだったね。孔子も『三人行えば、必ず我が師あり』と言っているし、『下問を恥じず』ことが大切だと。それに、『私は彼（訳者注…白文）の先生だからね、ふふ……』。この「ふふ」は、従姉が訳したものではなく、私自身が感じ取ったものだ。

残念ながら、私はかつて武者小路実篤の戯曲作品『或る日の一休』を読んだが、その中で強盗をする一休和尚について、当時私は詳しく尋ねることなく、自分勝手に「日本の済公」と推測してしまった。そして四十年後の今日、テレビで日本のアニメ『一休さん』を見てようやくその本当の意味がわかったのだが、どこか「何かを失った」ような感覚が残っている。

遅い時間だったので、街は人影もまばらで、表姉も若い女性だったため、私たちは帰ることにした。阿部先生はどうやら酔っていたようで、足取りもふらふらして、振り返って私の頭を撫でた。何という侮辱だろう！その頃の私は、自分が神聖で不可侵な大学生「ミスター白文」であると自惚れていた。

結局、S従姉が私を家まで送ってくれた。というのも、私は普段から「お化けが怖い」と口にしてきているからだ。

私の話を聞いて、あの「方さん」⁽⁹⁾は彼（訳者注…阿部先生）が悪い人ではないかもしれないと初歩的に判断した。一方的に連絡してくるこの文化委員の同志は、彼にもっと近づき、彼のことをよく知り、何か情報を得られれば一番良いが、なくても大丈夫、日本には戦争に反対する人、特に文人たちが大勢いるので、彼らの気持ちを少しでも理解することは良いことで、できれば、彼を説得するのでもいいだろうと言った。無論、彼は私に警戒を怠らないようにと言ったが、それはわかる。敵の支配下では、地下工作の規則は厳守しなければならない。

二度目の出会いは昼間だった。演劇のリハーサルがあるため、その日は学校に行かず、昼食後に太つちよ⁽¹⁰⁾と一緒に街をぶらついていたところ、そこでまた阿部教授に出会った。無論、私は飲みに行くことを提案し、再び「布柴バー」に行った。その日、彼にヴェルモットをボトルで注文してあげ、私自身はウォッカを選び、そして太つちよ⁽¹¹⁾がお茶を飲むことにした。この少し鈍感さのある才子（訳者注…太つちよ⁽¹¹⁾）は、時折滑稽な行動を取り、多少の洋涇浜⁽¹²⁾も話せる。しかし当時、私たちには横のつながりがなかったため、私も彼が組織を探していた一九三六年入党の党员であることを知らなかった。

話はもちろん文芸のことから始まった。当時、私はユージン・オニールに強く惹かれており、彼の戯曲の原文と訳本をいくつも読んでいた。また同時に、フロイトの『精神分析学』やジ

エームズ・ジョイスの『ユリシーズ』に代表される「意識の流れ」も学んでいた。——こうした手法は、オニールが表現主義者へと転じた後の劇作にもよく見られる。私は『ユリシーズ』を理解することは到底できなかったが、T君は何とか最後まで読み切った。これがなぜT君が翻訳家になつてゐるのに、私はまだ文化水準の高くない兵士のままであるかの理由を示している。余談はさておいて、私は阿部先生から彼の見解を聞いて、とても勉強になったと思う。それから、話題は転じて彼の個人生活へと移った。

「奥さんはいらつしやいますか」と太つちよしは洋涇浜で尋ねた。

「ええつと、それは、まだ……」⁽¹³⁾と、彼は「ゲツと」ヴェルモットを一杯飲み干した。

そこで、故郷、両親、兄弟のことについても、太つちよしは戸籍を調べているかのように、次々と聞いていった。

その時、外で空襲警報が鳴り響いたので、私たちは外へ出て見に行った。米国のB-29爆撃機が飛んでおり、日本軍の高射砲が二、三門発射されたが途中で爆発し、白い煙が空中に漂い、しばらく消えなかった。

当時、日本は敗戦寸前のように、B-29は三日に一度ほどの頻度で爆撃を行っていたが、租界に住む人々は、ここには爆弾を落とされず、主に「華界」の閘北や浦東を狙っていると知っていたため、それほど恐れていなかった。日本人も以前ほど威張っていなかった。石揮は彼が聞いた会話を教えてくれた：

ある日本の紳士は、空を見上げながら、「あれは米国のやつだ」と言った。

「違つ、お前たちのものだ」と、そばにいた中国人が言い返した。

「うーん、米国のだ」

「いや、日本のだよ」

その日本の紳士は、相手が皮肉を言っていることを知っていたが、反論する言葉が見つからず、白い目をして去つていった。これは作り話かもしれないが、事実であつてもおかしくない。

阿部先生というと、帰つてきてやけ酒を飲んでいたところ、突然、大声で「私たち日本人、日本人は、間もなく乞食になる運命なんだ。敗北が避けられないようだ……」と言った。彼の涙はメガネの縁から鼻筋と頬を伝つて流れ落ちた。

彼の慟哭している姿を見て、太つちよしも私も顔色を失うほど緊張してきた。私たちは、憲兵に捕まることを恐れているのではなく、彼にとつて不利なことが生じるのではないかと恐れていた。無論、彼が捕まつてしまつたら、私たちもひどい目に遭うかもしれない。しかし、この苦しみに対して、彼を慰める言葉を見つけることはできなかった。なぜなら、私たちは日本帝国主義の一日も早い敗北を心から望んでいたからだ。

バーの白系ロシア人の店主はこちらを見て、作り笑いをしていた。

「方さん」は私の報告に興味を持ち、阿部先生をもつと説得するよう促してくれた。とはいえ、私は先生が酔つて酒癖が悪

くなったり、酔っ払った勢いで口走るのが怖かった。

しかし、お互いが親しくなるにつれ、また気分の沈みも相まって、彼の酒癖はますますひどくなっていった。

場所はほとんど「布柴」のテントで、いつものようにヴェルモットを「グググググ」と飲んでいた。同席しているのは太つちよしとT君、そしてもちろん主に私である。彼はいつも酔っ払って泣き、時には「中国人に申し訳ない」といった謝罪の言葉さえ口にすることもあった。いつも同じような古ぼけたスーツとコートを着て、髪はぼさぼさで凍えて身を縮め、さぞかし辛い生活を送っているのだろう。いつも私が酒代を払っていた。

その年の冬は本当に長くて厳しい寒さで、北風も激しかった。何百何千人もの貧しい人々が路上で凍死し、敵対勢力の新聞でも、大見出しで「昨夜また五千人が凍死！」と報じた。朝、自転車で行くと、寒さで耳が痛かった。工部局の人たちはトラックに乗って、凍えた乞食の死体をそれに投げ込んでいた。これがまた阿部先生の後ろめたく、不安な心を刺激しているようだった。

午前中、彼がキャンパスで本を抱えて歩いているのをたまに見かけた。私に微笑みかけ、寒さで首を縮め、武士道の趣はまったくなかった。

私は結局、彼の授業には一度も行かなかった。

太つちよしはある時彼になぜ「知二」と名付けたのか尋ねたが、それは孔子が言った言葉だと答えた。「一つを知るだけで

は足りず、二つを知り、もつと学ばなければならない」と。この日本の教授は、私や太つちよしよりも孔子について詳しいようだ。

翌年の春、私は上海を離れ、新四軍に参加するよう命じられた。地下活動とはまた違う領域だった。

当然、それ以降、阿部先生に二度と会うことはなかった。部隊に着いて間もなく、私は戦友に先生の話を話した。するとある日、戦友に連れられてある村を訪れ、新四軍の制服を着た「日本解放同盟」⁽¹⁴⁾を見せてもらった。日本には阿部先生のような人がたくさんいるようだ。ファシストはファシストであり、そして人民は人民である。私はこれを当然知っており、そして以前から理解していた。

時が経ち、私は徐々に阿部先生のことを忘れていった。一九六〇年のある日、古い新聞を整理していると、阿部先生が一九五九年⁽¹⁵⁾に日本進歩作家代表団の一員として中国を訪れたというニュースを目にした。残念ながら、その時私は北京にいなかった。たとえ北京にいたとしても、私では彼を迎えることはできなかっただろう。

その後、「文化大革命」まで、彼のことを忘れていた。組織に報告したし、先輩たちにもこの日本の先生について話したことがあり、それによって私はあの批判運動に巻き込まれずに済んだ。

今年でちょうど四十年が経ち、あの年と同じく寒さが早く訪れた——私はすでに六一歳になったのかもしれない。娘は寒

さを感じないと言ひ、暖房をつけるのを反対している——そんな中、私は偶然にもこの一冊の本を手に入れた。

『隠者と人々』をじっくりと読み終えたとき、その清新な筆致と隼永な余韻は、阿部先生が日本語なまりの英語で文学を語っている姿を思い起こさせ、耳もとには彼が「グツと」お酒を飲み込む音が響いてくるかのようだった。

彼の思想は確かに進歩的な傾向を帯びていた。米国占領下のあの時代においても、先生は時折、酒に酔い、涙を流していたのではないだろうか。

三、中国語原文…「我的老師阿部知二」

從書店買回『日本当代小説選』，在窓下沏了杯茶，点了支煙，便開始欣賞，首先讀目錄。

前面的作家正宗白鳥、石川達三，早年會讀過他們的作品，但是不多，只能說是「面熟陌生」。至于谷崎潤一郎，則讀過他的選訳本『悪魔』，序里還曾介紹他是「悪魔派」。我不攻世界文学史，不知現在的評論家对他是怎麼個說法。好在這事已過去幾十年，我記錯了也沒關係。

這是怎麼的？391頁『隠士与群衆』，作者是阿部知二。是他嗎？是我曾經認識的那個書生氣十足的日本學者嗎？是我在聖約翰大學讀書時的老師阿部知二樣嗎？

我嘴裏的紙煙青煙繚繞着，陷入了沉思……

那是在整整四十年前，1964年的冬天。

那時我才二十一歲，正在劇團里演戲，因為工資不算少，組織上便叫我自費念大學，說是培養自己的知識分子。我和中学一起畢業的T君，幾經努力，一起考進了當時的「名牌大學」聖約翰。

這年冬天特別長特別冷，但我却起勁地在演着袁世凱，自以為演得還不錯。

一天晚上，戲散后，我正在后台卸裝，準備和石揮等同事去吃夜宵（現在叫「夜餐」），忽然舞台設計S同着一個日本人進來，說…「白文你的老師來找你啦。」

我當時吃了一驚，心想…怎麼日本人找上門來了？是不是我暴露啦？于是一边點頭，一边讓坐，同時用下裝紙擦着臉，思考着，觀察着。

當時我做地下工作已有幾年，又是做這種身份公開的秘密工作，所以比較沉着。我看他年約三十多，旧西裝，旧大衣，深度近視眼，滿有學者風度，判斷他不是個日本特務便是文化特務。突然他用帶着很濃重日本口音的英文和我說…「你是在聖約翰大學讀英文系的吧？」

我答道…「唔，唔……」一面用下裝紙揩嘴唇，一边從化粧鏡裏觀察他。

「我叫阿貝幾尼，也在英文系教書，哎呀，說起來還算是你的教師呢……你選讀了我的文學評論沒有？」

我搖頭。「可惜，你应当來聽聽我的課……」

這時，S給我介紹起來…「他叫阿部知二，是你們學校的教授，我們在日本就認識的。」

我的心放下了一点。我想，S在政治上是值得信任的，她在日本学画，抗战回来参加了新四军，因为病，精兵简政回来了，但政治表现上没有不正常的地方，也没进过宪兵队或「76号」。同时，说起来，还是一表三千里的我的远房表姊呢。根据我掌握的情况看，她没有必要来出卖我，何况我保密极紧，表现又有点灰色，连我妈妈也不知道我是共产党员，我怕点什么呢？

于是我把下装纸一丢，换下了服装：「走，吃布柴牛奶去！」所谓「布柴牛奶」，是一家白俄人在马路边上傍着一个小公园开的一家席棚酒吧。冬天卖酒和凉菜，以及热红茶，夏天则添上一种叫「布柴」的清凉饮料和克瓦斯。「布柴」象是一种牛奶似的乳液，但喝起来却是酸酸甜甜，凉水地，很消暑，很解渴，说是用谷物做的，比面包酿成的「克瓦斯」要好喝得多。剧团同仁，夏天经常去，而我，因为它也卖伏特卡和酸黄瓜，天气冷了便也去，惹得石挥经常笑话我。

当时喝酒是为了穿件伪装衣，不料到解放区后戒不掉了，至今年过花甲，还时常招到老婆孩子的责骂，这倒是早先没有料到的。

闲话少叙。话说我们走到「布柴」小酒吧，我便说：「您喝酒吗？」

「喝的，喝的，」他高興地說。

我叫了四杯伏特卡，買了点酸黃瓜，蕃茄肉，還有一杯紅茶——那是給「家表姊」S的——便和他干起杯來。我奇怪地聽到他下酒時，在嗓子眼兒里「咕嘟」一聲。

這可不得了，叫我是會呛出來的。直到現在，我即使一口干

完一立升啤酒或半斤白干，都一點聲音沒有，是抿着嘴灌下去的。若是喝到嗓子眼兒，便要大呛特呛，哪怕是涼開水。

他似乎很嗜酒，但酒量却不大，兩杯伏特卡入肚，便有些多話起來，舌頭也有些大了。恰好那白俄老板湊趣，拿個盤子端了兩大杯紅酒來，說這是「意大利的維爾蒙斯」，餽錢也不貴。他一喝便不覺叫起好來，又一口咕嘟下去了，我摸摸口袋里錢尚不少，便叫了一瓶來。

他開始問問我的學業，稱贊我的演技（現在寫起來還覺得不好意思，因為演得實在幼稚），併且認為認識我這樣的「名演員」于他做老師的也很光彩。我為了試探，同時也為了對日本文學的求知，便向他請教起來……

「請問「白樺派」的菊池寬……」

「請問關於武者小路實篤……」

不斷的問題從我嘴里提出來，他也慢騰騰地回答我的問題。不過我們的談話也真困難……我的英文程度很差，而他那日本味儿十足的英語，聽起來也頗難懂，虧得有S表姊做翻譯。但于文學上的問題她不甚了然時，我們便得用「手談」，不是下棋，而是用手指蘸了粘叭叭的維爾蒙斯在黑板上寫字。

「關於田山花袋的『春情草』……」

他笑了笑，用手指揩掉了玻璃板上的字，重寫了『春琴抄』。

我臉上一熱，覺得為了不懂裝懂而臉紅起來了。但他哈哈笑着拍了拍我的腦袋，說了一大堆日本話給我的表姊聽。

S表姊也對着我莞爾笑了，「他說你很有功，不懂就問，是值得欽佩的，孔子說，「三人行必有我師」，要「不恥下問」，何

況我是他的老師哟，喃喃……」

這「喃喃」不是我的表姊翻譯過來的，是我体会出來的。

遺憾的是我曾說過武者小路實篤的劇本『一休和尚的一日』，對這當強盜的和尚一休，當時我沒問清楚，而是自作聰明地猜想他是「日本的濟公」。到了四十年后的今天，我在電視裏看到日本動畫片『聰明的一休』，才知道是怎麼回事，然而却又彷彿有「若有所失」之感。

因為晚了，街上行人寂寥，S表姊又是個年輕的婦女，我們便走了。阿部先生似乎已醉了，脚步踉踉蹌蹌，回過頭來又摸了摸我的腦勺。這真是對我莫大的侮辱！因為那時我覺得自己是一個神聖不可侵犯的大學生，「密司特白文」。

結果呢，結果是S表姊送我回家，因為我平時聲言怕鬼。

「方先生」聽我講述經過以後，初步判斷他可能不是壞人。這位和我單線聯系的文委同志，要我多多接近他，多多了解他，有什麼情況最好，沒有情況也沒什麼，日本有很多反戰的人，尤其是文人，知道他們一點心情，也有好處，如果可能，還可對他做點工作。他當然要我十分警惕，這我明白。在敵偽統治下，秘密工作的紀律必須嚴守！

第二次見面是白天。因為排戲，這天我沒去上課，午飯后，我和L胖子去馬路上逛蕩，這就又遇見了阿部教授。自然，我提議去喝酒，還是上「布柴」小店。這天，我就直接要了一瓶維爾蒙斯，我自己則以伏特卡相陪，L胖只好喝茶。這位有点呆氣的人才子，時常開點笑話，也會幾句洋涇浜，當時我們沒有橫關係，我也不知道他是正在找組織的36年黨員。

談話自然還是從文藝說起。當時我正在迷戀尤金·奧尼爾，讀了一些他的劇本原文和譯本，同時也在學什麼伍洛依特的「精神分析學」和以詹姆斯·喬依斯的『尤利西斯』為代表的「意識流」之類——這種手法在奧尼爾后期成為表現主義者時的劇作中也時常可以看到。自然我是沒看懂『尤利西斯』，而T君却硬著頭皮把它讀完了。這就是為什麼至今T君已成為名翻譯家，而我却仍是一個文化不高的大兵之故。

話說我從阿部那裏聽了一些他的見解后，覺得很有收獲，随后，談話就轉到了他的個人生活。

「您有夫人沒有呢？」L胖用洋涇浜問道。

「唔，這個，還沒有……」他「咕嘟」一口喝下了一杯維爾蒙斯。

于是，問家鄉，問父母，問姊妹，L胖好象在調查戶口。

這時，外面空襲警報響了，我們走到門口去看，一架美國B-29轟炸機在高空裏飛，而日軍的兩三門高射砲打上去，在半路上就開了花，一团团白煙停在半空，久久沒有散去。

那年月，日本似乎即將戰敗，B-29三天兩頭來轟炸，租界里的人，知道它是不向這里投彈的，總是炸「華界」開北，或者浦東那邊，所以也不怎麼怕。

日本人也沒那麼神了，石揮說他曾聽見過一段對話：

一個日本紳士，看着天上說，「米國的。」

「不，你們的。」站在旁边的中国老百姓說。

「唔，是米國的。」

「不，你們的。」

那個日本紳士情知他在諷刺，但沒得話說，翻個白眼走了。我不知這是否瞎編的，但也可能屬實。

至于阿部先生呢，他回來喝了兩杯悶酒，突然大說起來：「我們，我們日本人，不久都要當乞丐了，我們眼見得要戰敗啦……」

他的眼淚從眼鏡邊上順着鼻梁和腮幫子淌下來，淌下來。

哎呀，他慟哭起來啦！我和L胖緊張得面無人色，倒不是怕憲兵特務來抓我們，而是怕對他不利。自然，他如果被抓走了，也沒有我們的好兒。不過這種痛苦我們没法找辭兒來勸止他，因為我們內心都盼望日本帝國主義早日被打敗。

那個開酒館的白俄看着干笑。

雖然「方先生」聽了我的匯報很感興趣，要我多做阿部的工作，然而我却很怕他發酒瘋，說酒話。

可是因為熟了，又加上他的心情不好，他的酒瘋也就越發越多了。

地点大都在「布柴」席棚里，照例地「咕嘟」、「咕嘟」灌維爾蒙斯，同坐的不是L胖便是T君，当然主要是我。他照例的酒后痛哭，甚至說出「对不起中国人」那種謝罪的話來。他大概生活很困難，永遠是那套旧西服，那件旧大衣，頭發蓬着，凍得很瑟縮。照例是我付酒資。

那年的冬天真是漫長的嚴寒，北風凜冽，街上的窮人一夜凍死的就上百上千，連敵偽報紙也用大號標題聳人聽聞地登着：「昨夜又凍斃五千人！」早上騎車上學的時候耳朵冷得生疼。工部局的人，開着卡車，把沿街凍僵的乞丐屍體往車上扔。

這似乎更激動着阿部知二歉仄、不安的心。

上午有時在校院里看見他挾着書走過去，向我微微一笑，身體凍得縮頸縮肩，一點也沒有「武士道」的味儿。

我也始終沒去聽他的課。

L胖有一次問他為什麼起名叫「知二」，他說這是孔子說的，「知一不够，必須知二，要學得多些。」

這位日本教授，對孔子倒比我和L胖熟。

次年春我就奉命離滬，去參加新四軍。比起做地下工作來，則又是一番境界。

自然，我從此再也沒有看到阿部知二先生。

到部隊不久，我還和戰友談起他，以致這位戰友有一天帶着我到一個村庄去看穿新四軍服裝的「日本解放同盟」。證明在日本，阿部這樣的人不少，法西斯是法西斯，人民是人民。

這道理，我自然也是懂得的，而且早就懂得了。

年復一年，我把阿部先生淡忘了。

六〇年的某一天，我整理旧報紙，看到一則消息，阿部知二先生59年曾參加日本進步作家代表團來訪問過中國，可惜當時我不在北京。不過，即使在北京，也輪不到我去接待他。

后来我又把他給淡忘了，直到「文化大革命」。反正我向組織上報告過，老同志都聽我講過這位日本老師的事，倒也沒為此挨斗。

今年，恰恰四十年，天又是冷得那麼早——可能我已61歲了，我的女兒就說不冷，反對生爐子——而我，恰好買到這麼一本書。

細細說完『隱士與群眾』，那清新的筆調，那雋永的韻味兒，

使我想起了他用那帶有濃重日本口音的英語，娓娓而談文學，耳
邊彷彿還伴着他「咕嘟」咽下一杯酒的聲音。

他思想的確是有進步傾向的。在美國占領軍統治下的那年月，
先生也是時常縱酒、流淚的罷？

【注記】

1 日中戦争中、阿部知二は上海を二度訪れた。初めての訪問は一九四三年十一月上旬から一九四四年二月までの間で、阿部は日本文学報国会の文化使節として、上海を中心に南京、杭州などで講演巡りを行なった。二度目の訪問は一九四四年九月末から一九四五年四月までの約半年間で、上海のセント・ジョーンズ大学で教鞭をとり、「文芸概論」と「文芸思潮史」の講義を担当していた。

2 日中戦争中における阿部知二の上海滞在の足跡や軌跡については、すでに竹松良明氏、徐静波氏によって整理がなされている。例えば、竹松氏の「阿部知二の湖南作戦従軍」（二〇一三）、「阿部知二…一九四四年冬の上海」（二九九九）、「セント・ジョーンズ大学と阿部知二」（二〇一四）、「戦時下上海の暗く寒い冬」（二〇一七）、そして徐氏の『近代日本文化人と上海 1923-1946』（二〇一七）などがその例である。しかし、以上で触れた先行研究が取り扱っている参考文献の殆どが日本語資料であることがわかる。

3 白文…本名は劉駿仁でペンネームが白文の中国の劇作家である。一九三九年、上海の学生救亡会に入会し、翌年には中国共産党に入党した。一九四一年以降は、上海の苦乾劇団の俳優、セント・ジョーンズ大学英語学科の学生（一九四二～一九四五）、第三野戦軍特縦隊文工団団長、前線劇

団副団長、南京軍区文化部創作員を歴任した。

4 白文「我的老師阿部知二」『文匯月刊』、一九八五年第七期。『文匯月刊』は梅朵が主宰する文芸綜合雜誌のことで、一九八〇年に創刊され、一九九〇年七月に停刊。

5 一九四四年十二月に白文は『雲南起義』で袁世凱役を演じた。

6 石揮（一九一五～一九五七）は、一九四〇年代から一九五〇年代にかけて広く知られていた中国の俳優、映画監督。

7 日本人訛りの中国語。

8 七六号…汪精衛政權の特務機関

9 方さんとは、地下党連絡員王元化のことを指す。

10 Lは、苦幹劇団でチェロを弾く李德倫のことを指す。

11 洋涇浜は、一般的には規範的に使用されていない外国語を指す。

12 ここでの「組織」とは共産党の地下組織を指す。太つちよし、すなわち李德倫は一九三六年に共産党に入党したが、白文と李德倫はお互いが黨員であることを知らなかった。

13 阿部知二は一九三〇年には結婚していたため、この部分は英語が悪いLと白文の聞き間違いではないかと推測する。

14 日本人民解放連盟を指す。日中戦争中、中国軍の捕虜となった日本軍兵士によってつくられた反戦団体。

15 正確には一九五四年。

【付記】本論文は、九州大学大学院未来共創リーダー育成プログラム（GIPAD）と中国国家留学基金管理委员会（20220850080）の助成によるものです。

（九州大学地球社会統合科学府博士後期課程三年）